

保育室内における子ども達の危険意識の向上について

こども保育福祉科夜間3年 3班

竹内 丈記 横山 千夏 加藤 智也 浪松 瞳

1. はじめに

私たちは子どもの安全に関心を持ち、園によって、また子ども個人によって危険への意識に違いがある事に注目した。子どもたちが安全な環境での生活が望ましいが、小学校就学等により保育者から守られなくなった子どもたちが自らの判断で安全に暮らすためにも、子ども自身・子ども同士で危険を回避する能力は重要だと考えている。又、その為に「危ない場所」を覚えるのではなく「危ない理由」と「対策」を知っている事が大切になるとも感じる。そこで、そのような子どもたちの危険への意識・理解の増進を目的として調査を始めた。

2. 研究内容

研究は就学を目前にしている5歳児を主な対象とする。保育室内の危険箇所(机のカド、鋭利な道具等)について、子ども自身がどの程度まで理解して回避行動できるのか把握することにより、環境構成の参考とする。加えて、子どもたちの意識向上が予想される活動を実際に行い、その様子から活動の有効性と効果的な活用方法を分析する。

3-1. 仮説①

普段から危険因子もある環境で過ごす子どもは、保育者から促されずとも自然に回避行動ができるのではないか。

3-2. 調査

〈目的〉 5歳児の活動から、普段の過ごし方やそれぞれの危険への意識を調査する。

〈方法〉【実地調査】 室内に危険因子をあえて配置している2つの保育園にて見学及びヒアリングを行った。

3-3. 調査結果

〈G園〉…園舎は鉄道高架下に構える

・日常生活の様々な事を自由に任せており、ほとんどは保育者の許可も要しない。

(散歩の参加と不参加・水分補給のタイミング・座る席・ラックの場所・給食の量・保育室と園庭の出入り等)

・部屋の環境や運動会のテーマ等も子どもたちがプロデュースする。

・マナーよく玩具を使用するために、子ども同士で話し合い『お約束』を決定、掲示を作成することもある。

・全体の様子として伸び伸びしており、些細な物の扱いや体の使い方が器用で丁寧である。

〈Y園〉…モンテッソーリ教育の実施園

・部屋中に様々な教具があり、何をどのくらい取り組むかは自由である。

・机や棚をあえて複雑に配置しており、植木や崩れやすい教具も床や棚の上に直置きという環境

…自分で器用に体をコントロールし、お互い自然に譲り合って落ち着いて生活している。

・本物の陶器やガラス、水を使った活動をしている子どもに対して、周りの子どもが配慮している。

・子どもと環境を出会わせることを大切に、小さい達成感を何度も経験することで自己肯定感へ繋げる。

〔共通点〕・自分の意思が通る経験が大切であり、大人が奪うべきではないと考えられている。

・子どもの能力・意思・選択という自主性を最大限まで尊重し、自己決定の機会に富んでいる。

・危険が発生する要因が多いにも拘わらず、自ら無意識に工夫して活動する様子が伺えた。

4-1. 仮説②

子どもが把握していない危険箇所について、その場での働きかけのみならず一旦子どもたちに問題を投げ掛けて、子ども同士で話し合い考える機会を持つとより効果的に意識して行動できるのではないのか。又、その活動が、危険である理由と対策を子どもが考えるきっかけになるのではないか。

4-2. 調査

- 〈目的〉・現時点で5歳児が具体的にどの程度の危険を認識しているのかを把握する。
・現時点での5歳児と保育者の危険認識の違いを比較する。
・危険意識向上が予想される活動として「子どもミーティング」を行い、「活動による変化がどの程度あるか」と「危険を判断する理由の理解も定着しているのか」の2点を調査する。

〈方法〉①【見学】

子ども及び保育者の行動やお互いの関わりの様子を観察して普段の過ごし方を把握する。

②【ヒアリング】

保育者及び5歳児全員に対して室内の危険箇所について質問し「危険だと思う」または「注意して気を付けている」と思う場所を、思い浮かぶだけ全て挙げてもらう。

③【子どもミーティングの実施】

子ども同士(5歳児全員)の話し合いの機会を設け、必要に応じて若干のサポート(開始・終了のみの進行・選んだ理由を尋ねる等)を行う。ミーティングでは予め作成した「室内見取り図」を子ども達が囲んで自由に話し合い「危ないかもしれない」と感じた箇所にシールを貼る。シールは1人1シート(約20枚)配布し、何枚でも自由に貼ることができる。

○室内見取り図は2種類ある。

【A: 訪問先の保育室】…ヒアリングと比較し、ミーティングによる変化を調査する。

【B: 仮想の保育室】(全く知らない環境であるため、イメージしやすくするため写真も配布)

…危険判断のための理由の理解があるか、初めての環境でも理由を基に危険把握できるかを調査する。

○使用手順はヒアリングの結果により変わる。(パワーポイントに手順のフローチャート)

【ケースⅠ】保育者と比べて子どもが挙げたものの方が不足していた場合

まずAの見取り図で自分たちの保育室の危険箇所についてミーティングを行った後、Bの見取り図でミーティングを行う。

【ケースⅡ】保育者と子どもの挙げた箇所が一致、もしくは子どもの方が多かった場合

Bの見取り図でのミーティングのみを行う。

4-3. 調査結果

【見学】

〈物との関わり〉

〈U園〉

- ・正しく椅子を持って運ぶ等、ルールを守る
- ・落ちている物(黒板消し、小物など)に気付き自然に拾う姿がある
- ・空間が広い所で小走りをするときもあるが、狭いところでは走っていない

〈S園〉

- ・椅子に正しく座り、両手で運ぶ
- ・全員分の連絡帳を名前が見えるように裏返してあげる子どももいる
- ・配膳時、机と机の間など、狭いところを通るときはゆっくり慎重に歩いている

〈対人関係〉

〈U園〉

- ・椅子を置きたい場所に他児がいた場合、「椅子置きたいから避けて」と声を掛ける様子がある
- ・友だちの名前を呼んでから声を掛ける

〈S園〉

- ・保育者との約束をしっかり守っている
- ・人がいるところを通るときは「ごめんね」と声を掛ける子どももいる

○保育者の様子

〈U園〉

- ・危ない場所や物があったら必ず理由も添えて伝える
- ・地震、火災、不審者の避難訓練をそれぞれ月一回ずつ行う

〈S園〉

- ・見学時、パーテーションを開けて保育していたが保育者の人数が少ないときは死角を少なくするためにパーテーションを閉める

【ヒアリング】

〈U園〉保育者

机の下、椅子の間、重ねた椅子、鉄棒、
絵本棚、ガラスドア、扉の開け閉め、
狭い所(おままごとの下、ピアノの所)、
ロッカーに登らない、歯ブラシ入れ、はさみ、
決めた場所にあるもの(さわってはいけない)

〈S園〉保育者

エアコンの上、トイレの奥、はさみ、
テープカッター、ホッチキスの芯

【子どもミーティング実施】

〈U園〉子ども

ピアノの角(頭をぶつける)
重ねた椅子、絵本棚、おままごと(倒れる)
歯ブラシ入れ(倒れる、小さい子が触ると危ない)
鉄棒(倒れる、下に座ると危ない)
はさみ(切れる)
植木(倒れる、砂が落ちてすべる、はっぱが頭にあたる)
〈S園〉子ども
テープカッター(友だちがけがをした)

〈U園〉A

棚、絵本棚、植木、重ねた椅子、鉄棒(倒れる)
机、キャスター机(倒れる、ぶつかる、潜ると危ない)
ロッカー(午睡時に地震で倒れる、登ると危ない)
ピアノ(角に頭をぶつけて血が出る)
ガラスドア(割れると刺さる)
押入れ(手を挟む、勝手に開けると物が落ちる)
水道(濡れると転んでおでこをぶつける)
水槽(ぶつかる、こぼれると滑る、蜘蛛が出る)
歯ブラシ入れ(倒れる、ガラス扉が割れたら危ない)
名札入れが置いてある机
(潜ると危ない、名札入れに頭をぶつける)
おままごとキッチン(倒れる、下に潜ると危ない)
道具入れ
(ぶつかる、小さい子は使い方を知らないから危ない)

〈U園〉B

棚、柱、ピアノ、積み木(倒れる)
机、椅子、植木、絵本棚(ぶつかる倒れる)
ロッカー(上の物が落ちると危ない)
重ねた椅子(崩れてくるかもしれない)
出入り口(開け閉めで手や指を挟む)
水道(水が溢れたら濡れて滑る)
道具箱の棚
(ぶつかる危ない、間に入ると危ない)
はさみ(切る部分が危ない)
セロテープ(カッター部分が危ない)
吊り飾り(割れそう、怖い)

〈S園〉A

ロッカー、上着をかける場所、おままごとキッチン、
重ねた椅子、ヘルメット、コップ(倒れる)
机(登ると危ない)
椅子(振り回したら危ない、ぶつかる)
畳、箱(振り回したら危ない)
ピアノ(ぶつかる)
押し扉(開けてはいけない、中の物が落ちると危ない)
横に開く扉(手が挟まる)
パーテーション大(ドアに引き込まれる)
パーテーション小(土台に挟まったら痛い)
水道(破裂したら危ない)
エアコン、空気清浄機(小さい玩具が入ると壊れる)
ダンボール(尖がっている所で切れる)
作った玩具を置く机(玩具が床に散らばる)
玩具の皿(割れたら危ない)
粘土、クレヨン(食べると危ない)
紙、ハサミ、鉛筆(切れる)
ラキュー(角が危ない)
床(転んだことがある、友達とぶつかる、床が切れて怪我をする)
トイレ(ポケットの中のものが落ちる)
階段(あわてて上ると転ぶ)

〈S園〉B

棚、植木、ロッカー、重ねた椅子(倒れる)
柱(ぶつかる)
机(角が危ない)
椅子(上からジャンプすると怪我する)
ピアノ(倒れる、ふたに挟まる)
ピアノ椅子(特別高い)
横に開く扉、ドア(挟まったら危ない)
ガラス窓(割れる * 台風の話から *)
水道(破裂したら危ない)
扇風機(髪の毛が吸いこまれる)
黒板、時計(落ちてきたら危ない)
積み木(崩れたら頭に当たる)
絵本(指を切る、指を挟まる)
道具棚のタイヤ(ひかれる)
はさみ、紙(切れる)
セロテープ(テープを切るところで怪我する)
吊り飾り(割れたら危ない)
床(走っていたら滑って転ぶ)

- ・両園とも増加し、ミーティングによる増加率はヒアリング結果の少ないS園の方が高い結果となった。
- ・見取り図の使用も保育室全体をイメージして危険の可能性を考える補助として有用であったと感じる。

5-1. 仮説③

ミーティングの実施後ある程度の期間を経たとしても、子どもたちの意識の定着が見られるのではないか。

5-2. 調査

○子どもミーティングを実施した園のうち、〈S園〉を再度訪問した。

〈目的〉子どもミーティングをきっかけに意識した危険箇所について、その場のみならず定着があるか。

〈方法〉【実地調査】ミーティング実施から約1ヶ月後に再度1回目と同じ内容のヒアリングを行った。

5-3. 調査結果

椅子、棚、棚のカド、空気清浄機…ぶつかる、引っかかる	階段…急いで登ると危ない
入り口のドア、トイレへ行くドア…手を挟む	トイレ…物が落ちる
ブロックやラキューの完成品…落ちてくる	はさみ、セロテープ…手が切れる
キッチンセット…ネジが緩んでいる	

- ・質問をすると、「覚えてる！」と言い回答を続ける姿、周りの物を見て指差しながら答える姿などが見られた。
- ・子どもミーティングの結果には満たないが1回目のヒアリングと比べ、1箇所→12箇所と大きく増加した。
- 考えたり、思い出そうとしたりする様子はなくすぐに回答→話し合いの内容を覚えていたと考えられる。

6. 全体考察

仮説①で訪問した園のように危険因子や自分で考える機会が身近な環境では、日常生活の様々な場面で危険回避体験・自己決定体験を重ねることで、子どもたちは自らの判断と行動で安全に生活する能力が養われていると言えるだろう。

仮説②からは子どもたちの危険意識に大きな変化が見られ、ミーティングによる向上率が元々の危険意識のレベルに拘わらなかった事からも、ミーティングによる効果が立証された。互いに意見を出し合うことで多角的に問題を捉えることができ、より様々な危険の可能性の気づきが見込まれる事もメリットと言える。

さらに、仮説③の結果からミーティングによる子どもたちの危険認識の定着はあると言える。従って、継続して定期的実施することで、より多くの箇所・理由の定着が見込まれる。危険意識が定着することによって自然な危機回避行動能力の増進も予想できる為、災害時など不測の場面の安全性向上にも継続的実施のメリットがあると考えられる。

7. まとめ

子どもにとって日常生活の中で危険と遭遇する体験は必要であり、それを基に回避能力を養う。私たち保育者はその体験の機会を保障する必要があるのだ。危険について考える材料として、実際の体験や大人からの声掛けも大切であるが、併せてこの子どもミーティングのような子ども自身で考える活動の有用性も分かった。今後も今テーマについて検証を続け、活用の幅を広げていきたい。

8. 参考文献

木村学(文京学院大学)「幼児の環境認識の研究 探索行動と危機回避能力の獲得を保証する保育者の役割」
<http://jsee.sakura.ne.jp/files/kanto/AnnualReport-10-029.pdf#search=%27%E5%B9%BC%E5%85%90%E3%81%AE%E7%92%B0%E5%A2%83%E8%AA%8D%E8%AD%98%E3%81%AE%E7%A0%94%E7%A9%B6%27>